

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

江戸時代後期における宿駅の実態：日光例幣使街道柴宿及び八木宿を中心として

著者	丹治 健蔵
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	15
ページ	127-144
発行年	1962-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/10110

江戸時代後期における宿駅の実態

——日光例幣使街道柴宿及び八木宿を中心として——

丹 治 健 蔵

はしがき

近世交通史に関する研究は最近とみに活潑になったとはいえ、宿駅の実態については成果が乏しいといわざるを得ない。

宿駅制の盛衰は幕藩権力の消長を如実に反映している。草創期の江戸幕府は強力な権力と保護によって宿駅制を整備し、交通手段を支配下に織込もうと企図した。それは公用人馬の継立や御用状の継送りを円滑ならしめ、幕藩体制の確立を推進するために他ならなかった。その為、宿駅に対しては地子の免許・一般旅客や商人荷物の独占的輸送の特典を与えた。

然るに、商品経済の発展に対応して、宿駅が繁栄したかといえば、必ずしもそうではなかった。日光例幣使街

道においては、特殊的事情もあろうが、文化年間以降の商品流通の展開につれて、宿駅は疲弊の段階に追いつまれて行くのである。こうした現象とは反対に公用人馬の継立数は逐次増加し、幕府や領主の助成にも拘わらず、宿駅の負担は過重となり、宿駅制の崩壊を促していったと言えるであろう。

小稿は、こうした視角から日光例幣使街道の柴宿⁽¹⁾及び八木宿⁽²⁾の文書を中心として、江戸時代後期における宿駅の実態を捉えようと試みたものである。

註(1)群馬県伊勢崎市柴町・関根甚左衛門旧蔵文書

(2)東京都北多摩郡国分寺町、中央鉄道学園所蔵文書

以下断りのない限り関根家及び中央鉄道学園とあるのは右の文書を指す。

一、例幣使街道の宿駅機構

1 柴宿の規模

日光例幣使街道とは中山道の倉賀野宿より分岐し、壬生街道の榎木宿までの道程を指し、その間、玉村・五料・柴・木崎・太田・八木・梁田・天明・犬伏・富田・栃木・合戦場・金崎の十三宿がある。大島延次郎氏は五駅便覧の見解を肯定しつつも「通説は玉村より今市までを例幣使街道と称している(1)」とされているが、柴宿の文書(2)には

「亥(文化十一年)二月九日

主膳印

美濃印

日光道中 千住の鉢石

壬生道 飯塚の板橋

御成道 岩淵の(岩槻)

例幣使道 玉村の金崎

右宿々 間屋

年寄

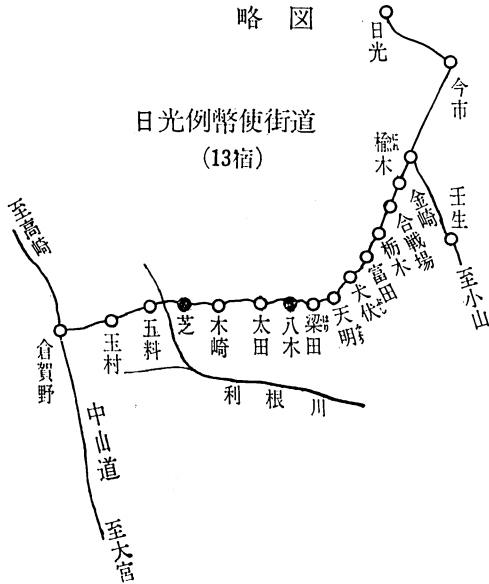
同助郷 名主

村々 組頭

「

とあるから、玉村より金崎までの十三宿とするのがよろう。また、道程については五駅便覧によると玉村より

榎木まで二三里一町とあるが、例幣使街道は倉賀野宿から分岐しているのであるから、倉賀野より榎木としなければならぬ。



さて、これら十三宿中、柴宿の規模について明らかにしてみよう。江戸時代における柴宿は上野国那波郡内にあり、伊勢崎藩主酒井氏の領国下にあった。上之方(倉賀野より)五料宿へ一里、下之方(日光より)へ三里二八

第 1 表

	柴 宿	加宿中町
宿 高	730石8斗5升	630石4斗8升
宿 内 人 別	男265 女166	男98 女97
宿 内 家 数	107軒	49軒
本 陳	1軒	なし
脇 本 陳	1軒	なし
旅 籠 屋	中 6 小 4	中 2 小 1
宿 立 人 馬	記載なし	記載なし
地 子 免 許	なし	なし
問 屋 場	3ヶ所	一
問屋場給米	なし	なし
宿 役 人	問屋年寄兼帯4人	問屋年寄兼帯2人

(文化2年 宿方明細書上帳による)

町の道程の位置にあった。柴宿の概要を示せば第1表の通りで、日光よりの街道に面した柴中町及び堀口村が加宿とされ、これらを合せて一宿としての機能を果していた。堀口村についての状態は明らかでないが、天保十四年の柴宿(加宿も含む)の家数・二一九軒、人口は八〇五人(男四二九・女三七六)であるから⁽³⁾、中町と同程度のものと考えられる。本陣は代々関根家が勤め、問屋・年寄役などを兼帯していた。人馬継立の間屋場については次のように記されている。

「二、問屋場三ヶ所 平日当番宅ニ而相勤申候
但毎月朔月十日迄 当宿ニ而相勤来候

同 十一日廿日迄 加宿堀口ニ而相勤来候
同 廿一日晦日迄 同中町ニ而相勤来候」
右の通りであったとすれば特定の間屋場⁽⁴⁾はなく、柴町・堀口・中町の間屋当番宅で人馬の継立を行っていたことになる。

次に宿役人についてみると、柴町及び中町だけで問屋・年寄兼帯者が六人となっている。他宿に比して問屋の人数が多いのではないだろうか。宿住民の生業についてみると、「男女共ニ農業の間、男者駄賃附繩延打、女者縮木綿織物糸引等の手業仕候⁽⁵⁾」とある。当宿は上州の機業地帯、伊勢崎へ一里、五料宿との間に利根川が貫流していたことは注意する必要がある。宿立人馬については記されていないが、駅肝録によれば例幣使街道の立人馬は二五人、二五疋とされているが、実際にはそれだけの立人馬はなかった⁽⁶⁾。

以上で柴宿のあらましについて述べたが、小規模の宿駅であったことを理解されたことであろう⁽⁷⁾。

註

- (1) 大島延次郎氏・『日本の路』(至文堂) 一一九頁
- (2) 関根家文書「日光山御法会御用留」文化十一年
- (3) 児玉幸多氏・『宿駅』(至文堂) 二二二頁
- (4) 関根家文書「宿方明細書上帳」文化二年

(5) 同 右

(6) 関根家文書「御継立人馬日〆帳」慶応元年及び中央鉄道
学園文書「宿賄諸入用勘定帳」天保十二年による。

(7) 児玉幸多氏・「宿駅」(至文堂)の末尾に五街道宿駅一覧
が附してあるから、例幣使街道一三宿については参照さ
れた。但し木崎宿については記録がない。

2 宿役人の構成

柴宿の機構中、特に注目を要するのは宿役人の構成で
ある。

先ず、寛政八年の宿役人の構成をみると、

一、問屋場 市左衛門(柴町・問屋・年寄兼帯)

甚左衛門(〃 本陳・問屋・年寄兼帯)

藤 吾(加宿中町・問屋・年寄勤帯)

伝右衛門(同 右)

次兵衛(加宿堀口村・問屋・年寄兼帯)

仙右衛門(同 右)

此段問屋場の義者平日六人ニ而一ヶ月五日替リニ往還御用向
相勤大通行有之候節者右六人之内江問屋場老軒の立宿役人下
役共相詰御用相勤候仕来ニ御座候⁽¹⁾

とあり、六人が交替で人馬継立の衝に当たっていた。然る
に文化二年になると柴町の問屋・年寄が四人、中町が二
人、これに加宿の堀口村を合せば八人であつたろうと
思われる。更に文化十一年になると問屋六人、年寄十二

人の名が見えるが、「問屋之義者寛政年中書上候巨細書
ニ六人與書上候ニ付此度も六人ニ仕候様御察当ニ付⁽²⁾」
とある文面よりすれば表向は六人であるが、現実には、
これを上廻る人数であつたろうと推察される。慶応元年
における「御継立人馬日〆帳⁽³⁾」によると、問屋・年寄兼
帯者十七人が輪番制で人馬継立の役割を果しているの
である。例えば第2表は七月分の勤務割であるが二日〃四
日交替で問屋・年寄役を順次勤めている。ただ勤務回数
には年間を通じて相当の差があつたようであるが、柴町
は一日〃十日迄、加宿堀口村は十一日〃二十日、中町は
二十一日〃晦日の原則は実施されていたようである。
ではどうして、このように多人数が問屋・年寄役を輪
番制で勤務していたのであろうか。これは柴宿が加宿の
協力が必要とする特殊な条件にあつたこともあろうが、
宿の経済的な事情から、宿役人の変化を余儀なくさせた
のではないだろうか。この問題を究明する前に例幣使街
道の人馬継立の規模について触れてみよう。

註

(1) 関根家文書「当宿助郷村高竝御貸附金有無訳宿方仕来書
上帳」寛政八年

(2) 同 右「日光山御法会御用留」文化十一年

(3) 同 右「御継立人馬日〆帳」慶応元年

柴宿問屋年寄勤務回数

勤務者名	問屋	年寄
甚左衛門	17	13
伊左衛門	10	9
伝左衛門	12	7
利左衛門	2	14
助左衛門	14	16
長右衛門	9	4
市左衛門	3	6

註 1日～10日勤務の柴町・
1, 2, 6, 7, 8, 9, 10月
の7ヶ月分計

第2表 柴宿問屋・年寄勤務表

月 日		問 屋	年 寄
7	1	長左衛門	甚左衛門
	2	〃	〃
	3	甚左衛門	伊左衛門
	4	〃	〃
	5	伊左衛門	助左衛門
	6	〃	〃
	7	助左衛門	利左衛門
	8	〃	〃
	9	市左衛門	助左衛門
	10	〃	〃
	11	治兵衛	佐兵衛
	12	〃	〃
	13	〃	〃
	14	〃	〃
	15	佐兵衛	藤左衛門
	16	藤左衛門	藤兵衛
	17	〃	〃
	18	〃	〃
	19	藤兵衛	藤左衛門
	20	〃	〃
	21	伝次	藤 吾
	22	〃	伴 藏
	23	〃	〃
	24	喜兵衛	倭三郎
	25	〃	伝次
	26	〃	〃
	27	〃	〃
	28	伴 藏	〃
	29	〃	〃
	30	〃	〃

(慶応元年日帳による)

1

人馬継立数

二、例幣使街道における人馬継立の規模

柴宿における人馬の継立数をみると意外に少く、宿、

江戸時代後期における宿駅の実態(丹治)

助郷勤を合せても、文化十五年には人足八六二人、馬五一九足にすぎないのである。年間を通じて最も多いのが四月であり、次が七月であるが、これは例年四月十二日に日光廟へ参向する例幣使の通行のためであり、七月は大名の通行のためであろうと思われる。通年における大名衆の通行は一、二回にすぎないのである(一)。

日光例幣使の通行は宿駅にとって負担が重かったであろうが、幕末に至るまでは宿駅を窮乏させる程のもではなかった。さて、以上は公用人馬の継立数であるが、宿駅の経済的收入となる商人荷物物の輸送はどの位であったろうか。八木宿の場合を見ると

「一、銭五百五十文

第3表 文化15年宿・助郷人馬勤高表（柴宿）

月	宿		助		郷		合		計
	人	足	馬	人	足	馬	人	足	馬
1	24		16				24		16
2	22		24				22		24
3	9		38				9		38
4	71		57	126			197		57
5	23		42	11			34		42
6	54		25	13			67		25
7	{(31) 21}		48	159			190		48
8	22		73				22		73
9	17		57	30			47		57
10	59		47				59		47
11	33		52	6			39		52
12	11		40	8			19		40
計	(376) 665			(353) 197			(729) 862		519

（文政4年助郷人馬勤高表による）

内 訳

御朱印御証文 50人 20疋
賃人足 295人
賃雇馬 323疋
添人足 323人
御用状持他 194人

- 註1. 伝馬の内訳については他に記載がないので不足分は不明。
2. 人足欄中（馬）内の数は筆者・過不足の理由は不明

ず、人足数は増し、馬数が減じている。
又、宿助郷との割合をみると、助郷勤高が著しく増大しているのが目立っている。人足数が増大した理由は幕吏及び仙台藩士の往来が多かった為である。助郷人馬が増大し、宿勤馬が減少したことはどのような理由からであろうか。

註

（1） 関根家文書「御通行休泊覚」天保十年～十五年

同 右「御休泊控帳」文化二年
（2） 中央鉄道学園文書「宿賄諸入用勘定帳」天保十二年

2 宿立人馬と助郷人馬

例幣使街道の宿立人馬については、駅
肝録には

一、佐屋路 例幣使街道

日光道中 水戸道中 立人馬 貳拾五人
甲州道中 壬生道中 貳拾五疋
岩槻道中 奥州道中

是は人馬元賃銭之内本馬輕尻人足共上り下りに不抱屯人
意足ニ付銭屯文ツツ口銭宿方江請取候分（2）
とあり、年間を通じて僅か五五〇回程度にすぎないので
ある
次に慶応元年における柴宿の場合をみよう。（第4表）
四月及び十二月の二ヶ月分が除外してあるのにも拘ら

と記されている。右の通りであったとしても、それが実
行されていたとは考えられない。

第4表 宿助郷人馬勤高表(柴宿)

月	宿		勤		助 郷 勤		計	
	人	足	馬		人	足	馬	
1	56		6		0		0	
2	87		23		50		16	
3	66		7		109		16	
4								
5	41		6		25		15	
6	90		11		0		0	
7	27		16		71		15	
8	71		13		158		22	
9	116		8		10		7	
10	95		7		0		0	
11	32		4		0		0	
12								
計	681		101		423		91	
							1104	
								192

(慶応元年御継立日ノ帳による)

- 註 1 日ノ帳の記載中助郷勤の当日宿助郷の人数割不明なものは全て助郷勤とした。
- 2 4月分は日ノ帳の記載が混乱していたので除外した。12月分は記録なし。3月分は25日までの分を集計した。
- 3 厩人馬1日5人5疋であるがこれも除外した。

是ハ御朱印御証文實無賃添共宿加宿往
来之助成も有之候ニ付前々々軒別順番
勤ニ御座候(一)

右の如く記されており、実際の宿立人馬は十人十疋であったことになる。従って、柴宿でも天保年間にはこの程度であったと考えて差支えなからう。然るに慶応元年の柴宿を見ると宿立人馬が著しく減少し、その負担が助郷への課徴となって現われてくる。即ち、馬五疋以上の場合には必ず助郷を徴発している。宿馬の使役は最高三疋を越えることはなかった。(第5・6表)

このような結果から、幕末・慶応年間には宿立馬は甚だ少かったと推察出来る。日ノ帳には日々厩人馬五人五疋と記載されて

いるが、八木宿の例から考えても、これは名目だけのもので、厩馬五疋の数すらも割っていたものであろう。

では、このような現象を生じたのはなぜであろうか。恐らく宿の窮乏が甚しくなり、伝馬の維持が困難となって来たからではなからうか。

註(一) 中央鉄道学園文書「宿賄諸入用勘定帳」天保十二年

八木宿の例を見ると

「一、銭五拾五貫九百文

御伝馬拾貳疋之内

厩馬引拾疋宿立之分

世話人方江相渡申候

同人足

江戸時代後期における宿駅の実態(丹治)

第 6 表

月 日	人足数	馬 数
1. 20	9	3
1. 22	14	0
2. 10	9	1
2. 20	6	2
2. 28	9	1
3. 3	11	0
4. 20	17	1
5. 6	6	0
6. 1	13	3
6. 12	7	0
6. 18	7	2
6. 21	10	0
6. 28	7	0
7. 6	11	0
7. 9	6	1
8. 8	11	0
8. 10	11	2
8. 16	6	0
8. 23	12	0
9. 2	19	0
9. 3	15	1
9. 7	7	0
9. 10	18	2
9. 13	8	0
9. 16	12	2
10. 6	8	0
10. 13	9	0
10. 19	6	0
10. 25	15	0
10. 28	7	0
11. 6	6	0
11. 17	6	0

(慶応元年日ノ帳に
より、宿勤人足5人以
上の場合を抽出してみ
た。)

第 5 表 慶応元年柴宿助郷勤高表

月 日	宿 勤		助 郷 勤		合 計		備考
	人足	馬	人足	馬	人足	馬	
2 8			42	8	42	8	助郷勤との記載なきも助郷勤と推定される。
2 12			8	8	8	8	
3 7	2		30	2	32	2	
" 20			44	8	44	8	
" 21			27	6	27	6	
" 22			21	5	21	5	
" 23			39	4	39	4	
" 24	1		8	1	9	1	
4 19			233	40	233	40	
5 16			20	10	20	10	
" 19	1		5	5	6	5	
7 17			18	6	18	8	
" 18	1		27	1	28	1	
" 30			26	8	26	8	
8 2			22	3	22	3	
" 5			9	5	9	5	
" 6			8	1	8	1	
" 7	3		12	4	15	4	
" 9			30	6	30	6	
" 17	2	1	17	1	19	2	
" 22			35	1	35	1	
" 27			25	1	25	1	
9 8			10	7	10	7	

(慶応元年日ノ帳による)

- 註 1. 3月26日～4月30日及び11月19日～12月31日まで
は日ノ帳の記載が混乱又はなき為に省略した。
2. 表中宿勤の記載なきは、宿勤、助郷勤の人馬負担
の割合不明のため助郷勤とした。
3. 宿勤中厩人馬5人5疋は記載せず。

三、大通行と宿駅との関係

では柴宿が窮乏するのはいつ頃からであらうか。
寛政八年の幕府への答書には次のような文面がある。

〔前略〕 刎銭溜御貸付金竝宿助成金其外宿方々差出金貸附
之類無御座候

一、宿方拝借金或者御手当金等拝借類無御座候（下略）〔一〕
とあるから、文化年間以降と考えられるのである。そこで、宿の窮乏化に大なる影響を与えたであらう大通行について考察してみよう。

1 日光例幣使の通行と宿駅

天和三（一六八三）年における例幣使の継立人足は一〇二人にすぎなかった〔2〕が、天保期には可成の増加を示している。例えば天保九年の八木宿における助郷人足は三六ヶ村から六一〇人（百石ニ付六人）となっている〔3〕。又、同時期頃と見られる柴宿の文書によると宿助郷人足四七五人となっている〔4〕。では例幣使の通行に際して、宿の出費はどの位であらうか。天保十一年の場合には

〔同十一年子年四月十二日

飛鳥井宰相様

右諸色入用

江戸時代後期における宿駅の実態（丹治）

金貳両貳分

銭拾貳貫貳百文

内 訳

金貳分

銭壹貫貳百文

是者右同断御本陣江相渡申候

金貳両

銭四貫文

是者右同断御供方被差上申候

銭四貫文

是者同断問屋場諸色入用ニ御座候

銭三貫文

是者右同断渡船場諸色入用ニ御座候〔5〕

とあり、天保十年（嘉永元年）の十ヶ年間の入用は金二両四一分、銭一二四貫三〇〇文〔6〕であるから、これだけの負担とすれば宿を窮乏化させる原因とはなり得なかったであらう。勿論宿の負担は、この他「御例幣使野宮宰相中将様御通興ニ付天明宿迄宿駕籠三拾挺分入魂与唱ひ差出申候？」とあり、銭二〇貫二〇〇文が宿入用金として記されているのを見ても、宿の負担はこれだけであったとは考えられない。しかし、御朱印、御証文や御定賃錢による人馬の継立数が幕末に近づくにつれ増加しつつあったことは明らかである。

註

- (1) 関根家文書「当宿助郷村高竝御貸付金有無訳宿方仕来書上帳」寛政八年
- (2) 大島延次郎氏『日本交通史論叢統編』吉川弘文館、七九頁
- (3) 中央鉄道学園文書「助郷村々寄人足触出帳」天保九年
- (4) 関根家文書「大通行御定人馬竝御雇人馬竝立書上帳」幕末、年月不詳
- (5) 同 右「例幣使御通行竝諸色入用取調帳」嘉永元年六月
- (6) 同 右
- (7) 中央鉄道学園文書「宿附諸入用勘定帳」天保十二年

2 御神忌大通行と宿駅

東照宮の祭祀は文化十二年(二百年忌)及び慶応元年(二百五拾年忌)には特に盛大に供養が行われたようである。従って参向する公家衆の人数が多く、幕府・領主・宿助郷とも人馬の継立や休泊に関し、多大の負担となつたのである。

幕府では前年から街道及び宿駅施設の視察のため、御勘定組頭以下の役人を派遣し、人馬の継立や休泊を円滑ならしむるよう監督させた。

文化十二年には「御法会御用付者御継立凡三十日程有之右日数の内五日程は人足千式百人、馬百疋ニ而相返し

之御継立も可有之候⁽¹⁾」との御触があった。かくて、本陣、脇本陣、旅籠の修築、臨時の人足小屋、馬寄小屋の建設、宿駕籠、提灯の修理が為されねばならなかった。宿では、宿役人と助郷惣代との寄合、例幣使街道十三宿役人が寄合を開き打合せをしている。では、これら御神忌の大通行にどの位の人馬が動員されたのであろうか。八木宿の場合には、宿助郷人足四、二〇三名、本馬三四三疋、軽尻馬七疋と記されている⁽²⁾。四月といえは農繁期のことでもあり、前後一ヶ月間の継立であるから、その負担は並大抵のことではあるまい。柴宿では前宿、五料宿との間に利根川の渡船場があり、次の木崎宿までの道程三里二八町もあったので継立の労苦の程が偲ばれる。例幣使通行に際して、利根川の渡船場では、前々から枝瀬に歩行橋を掛け渡し、船着台を岸辺に数多く拵えておいた処、前夜になって雪解出水の為夜中に多勢の人足が出動したと記されている⁽³⁾。

然るに、幕末慶応元年の御神忌大通行には「御勘定様被仰聞候者文化度之倍之御通行に相成候⁽⁴⁾」と云う有様で八木宿の寄人馬を見ると文化十二年を遙に凌駕している。(第8表)

いま、公卿、竹屋前宰相の例を見ると

「二、竹屋前宰相様

御朱印 人足 八人

馬 六疋

御証文 人足 百貳拾七人

雇人足 三拾人

合 人足 百六拾五人

馬 六疋

(此訳中略)

差引人足 八拾七人増(御雇人足の増加分)

此賃銭

外ニ(遠見その他)

小以人足 三拾人(5)

となつてゐる。人足数二五二人、遠見等の宿勤人足を加えれば二八二人にのぼるのである。

このように夥しい人馬はどのようにして徴発したのであろうか。梶井宮の例を見ると

「 覚

一、人足 貳千三百拾五人

内千八拾六人 定助郷(八木宿の定助郷は三六ヶ

村)

内七百七拾五人 雇上ヶ村(定助郷でも不足分相

対賃銭にて契約しておく)

内四百貳拾人 買上ヶ人足

残百三拾四人 不勤之分

江戸時代後期における宿駅の実態(丹治)

第7表 慶応元年御神忌大通行人馬継立数

月	日	主なる通行者名	寄人足	寄馬	宿勤人足
4	2	梶井宮	2530	150	70
	3		< 524	< 15	
	4		(149)	(6)	
	5		(170)	(10)	
	6		(100)	(10)	
	7		(100)	(10)	
	8		(172)	(15)	
	8	町尻宰相、清水谷宰相、植松少将、坊城左少将	3219	215	150
	9	飛鳥井中納言、難波少将	4159	172	170
	10	中園近江権介、慈光寺大膳太夫	4367	155	170
	11	中御門右大弁宰相、今城宰相中將	4581	150	170
	12	四辻中將、樋口右馬権頭	4467	154	150
	13	竹屋前宰相、小倉中將	1337	96	90
4日~13日 70名			25,726	1,152	970

(八木宿、梶井宮御通行ニ付御継立仕人馬書上写)

註()は不勤人足数

右梶井宮様竝御警衛方御通行ニ付御継立仕候外人馬数書面
之通り奉書上候

日光例幣使道 八木宿

問屋 安右衛門〔6〕

右によつて大通行の規模が凡そ察せられるであらう。

註

- (1) 関根家文書「日光山御法会御用留」文化十一年
- (2) 中央鉄道学園文書「東照神君御法会御通之面々御姓名
写」文化十二年
- (3) 関根家文書「御答書之写(利根川渡船動についての嘆願
書)」天保二年
- (4) 同 右「御神忌御通行日記」慶応元年
- (5) 中央鉄道学園文書「今城様々五卿様分四月十一日ノ帳」
慶応元年
- (6) 同 右「梶井宮様御通行ニ付御継立仕人馬書上写」
慶応元年

四、幕府及び領主の助成策

1 人馬継立賃の補償

公家衆の大通行は御朱印・御証文の無賃人馬が多かつたであらうから、この負担はどうなっていたのであろうか。雇上ヶ村・買上ヶ人足には当然相對賃錢を支払わなければならぬし、定助郷の場合にも御定賃錢を負担し

なければならぬ。然らば人馬賃錢だけでも莫大なものとならう。

文化十二年の御神忌御用留には

「当四月日光御法会ニ付日光道中御成道壬生道共ニ三月廿四日
ノ四月晦日まで例幣使道之義者三月廿五日ノ四月十五日迄御
法会御用ニ付通行之面々継立候人馬者元賃錢共ニ五倍之御手
当被下候間宿々竝助郷村々共ニ可相心得者也

亥二月二九日

主膳印

美濃印 (一)

とある。この五倍増の運賃をどう解すべきであらうか。御定賃錢の分だけ五倍増とし、通行の公家衆等に負担させるのであろうか。慶応元年の大通行には「(前略) 当節諸色格別高直ニ付可為難儀候間別段之訳を以此度限り為弁当代式倍五分被下都合元賃錢とも七倍五分之御手当被下候(下略)」と宿及び助郷村への御触がある。そこで、慶応元年の日ノ帳を見ると

「四月四日

禁裏御樂所

一、窪甲斐守様

御朱印

一、人足四人

一、馬 壹疋

但し馬代人足式人

(中略)

小以 人足 三拾八人

ノ 馬 壹疋

内 三拾人 御定賃銭請取候分

此賃銭三貫三百拾貳文

外ニ杖払 貳人

提灯 貳人 (3)

と記されている。天保九年における八木宿から天明宿までの御定賃銭は本馬一四五文、軽尻九五文、人足七〇文であるから(4)、公家衆の負担する雇賃銭は七倍五分増でなかったことは明らかである。では、そうした差額はどのようなのであろうか。

然しながら、このような倍増賃銭が例幣使街道十三宿掛代官から宿助郷人足に支払われていたことは次の文面によって知ることが出来る。

「合銭 千三百八拾四貫四百五文

右者此度日光就御法会御参向之御方々様其外御通行ニ付御継立仕候勤人馬不動之人馬其外共私とも一同為御立会其日限又ハ金貳朱一分ニ満とひ候節端銭相添人足共江紙切手と御引替被成御渡無相違奉請取候依之連印差上申候如件
文化十二亥年五月十二日春認上候

江戸時代後期における宿駅の実態(丹治)

吉川永左衛門様御手代

松井六作様 (5)

これを見ると不動人馬にも支払われている。更に「継立方ニ者不払人馬迄御手当有之ニ付甚取込ニ相成申候(6)」との記録もある。

以上の結果より推察すれば、勤人足に対しては五倍増不動人足については約半減(7)の差はあるにしても、継立人馬及び宿勤人足に対して、文化十二年には公家衆の負担した分以外の人馬賃銭を幕府が全面的に負担していたものと思われる。

かような大通行に際しては人馬賃銭の負担を宿・助郷にのみ課すことは、幕府の権力をもっとしても到底不可能な状態にあったといわなければならない。

註

- (1) 関根家文書「日光御神忌御用留」文化十二年
- (2) 同 右「御神忌御通行日記」慶応元年
- (3) 中央鉄道学園文書「四月三日ヨ八日迄御継立日ノ帳」慶応元年
- (4) 児玉幸多氏『宿駅』五街道宿駅一覧参照
- (5) 中央鉄道学園文書「東照神君御法会御通之面々御姓名写」文化十二年
- (6) 関根家文書「日光御神忌御用留」文化十二年
- (7) 「同 右」によれば柴宿より木崎宿まで勤人足一人に

法政史学 第一五号

一四〇

付三九二文、不動人足一人に一五六文、動馬一疋に付七八八文、不動馬一疋に付三一六との記録がある。

2 臨時の助成金

文化十二年の御神忌大通行に際して、幕府は人馬賃金の負担の外、更に次のような助成金を宿に下賜した。

「幕府下賜金

人馬小屋 三ヶ所へ 金拾五兩

宿駕籠

金拾五兩

提灯

渡船場入用

金四拾五兩

内訳

船雇賃 二五兩二分百十九文（五料宿へ）

五料宿へ十兩 柴宿へ十兩

本陳置替金

金三兩一分永百十文

宿役人手当金

問屋

六人 銀六匁宛

年寄

十二人 銀五匁宛

帳附

三人 銀二匁五分宛

馬差

三人 銀二匁五分宛

惣代助郷

四人 銀五匁宛（一）

又、領主伊勢藩主より次のように貸付金が交付された。

「六月朔日御上様御拝借被成御渡被下候

一金拾兩者 当十二月々十ヶ年賦 御本陳江（家具調度品）

一金五拾兩者 同 断 当町旅籠屋共へ
一金拾兩者 同 断 中町同断（二）

領主からの貸付金が、幕府より拝借した上でなされている。この他、領主から脇本陣に対して九兩一分二朱ト十八文の座敷修理の手当金が下賜された。

かように幕府及び領主からの助成があっても例幣使街道の如き小規模の宿駅では宿及び宿住民の重荷となり、宿を窮乏化させたであろうことは言を要しまい。

文化十二年の場合でも然りとすれば、江戸幕府崩壊寸前における慶応元年の大通行は人馬継立数から推測して宿の負担も倍加したことであろう。

註

（一） 関根家文書「日光御神忌御用留」文化十二年

（二） 同 右

3 御伝馬囲金

例幣使街道の宿駅では宿立人馬の負担はどうなっていたのであろうか。八木宿では囲馬二疋を除き十疋の宿立分があった。一疋の年間の賄料は五貫八十文、十足分として五五貫九百文を八木宿の家数九四軒中、宿役人六軒分を除き、八六軒に一ヶ月五八文の割で負担させている。人足については御伝馬囲金の利息で賄っている。即ち、囲金二百兩二分の一ヶ年分の利息が三十兩ト錢四百八十

四文である。この中から問屋場の入用、宿役人賄料、半紙代、五兩六百八十六文を差引いた残金、貳拾兩三分錢七百三十文を本百姓五〇軒に、四兩一分二朱ト錢一貫五百文を借家もの三六軒へ割渡している⁽¹⁾。

この御伝馬厩金の資金源は何であらうか。

まず考えられるのは刎錢制度である。柴宿の刎錢は寛政十一年から十ヶ年間、二割五分増とし、二割は勤人馬へ五分は岩鼻代官所へ上納している⁽²⁾。又嘉永四年、栃木宿では一割五分増であったが、七分五厘を出人足へ、七分五厘を刎錢溜錢としている⁽³⁾。然し、例幣使街道の如く人馬繼立数が少い宿駅では二百兩余の資金となったとは考えられない。栃木宿の定助郷の出人馬に対する刎錢は一貫五百三十七文にすぎない⁽⁴⁾。宿と共に例幣使街道では最も宿駅の規模が大であっても、この程度であったとすれば、御伝馬厩金の資金にはなり得なかったことであらう。

天保十二年の八木宿の宿賄諸入用勘定帳⁽⁵⁾には

「一、錢壹貫八百七文

是ハ人馬賃錢壹割五分増之内七分五厘勤人馬へ相渡し宿方江被下候七分五厘三分」

とあるから、刎錢が宿財政の財源となっている。然るに同じく

江戸時代後期における宿駅の実態（丹治）

「一、金壹兩貳分

是ハ飯売旅籠屋先年御伝馬助成金として差出し小前へ貸附置年々利足取立宿入用ニ引当候分⁽⁶⁾」(傍点は筆者)とある。この御伝馬助成金と御伝馬厩金との関係は明らかでないが、いずれにせよ幕府及び領主が伝馬制維持の爲の助成策を、かように講じつつあったことが窺われる。

註

- (1) 中央鉄道学園文書「御伝馬金利息割渡帳」天保十四年
- (2) 関根家文書「当宿助郷村高竝御貸付金有無訳宿方仕来書上帳」寛政八年
- (3) 関根家文書「助郷人馬賄錢諸入用勘定帳」天保十二年
- (4) 同右「栃木宿・助郷人馬賄錢諸入用仕訳帳」嘉永四年
- (5) 中央鉄道学園文書「宿賄諸入用勘定帳」天保十二年
- (6) 同 右

五、幕末における伝馬制崩壊の兆

文化十二年の御神忌大通行が宿の窮乏に大なる影響を与えたであろうことは領主から多額の借金があったことでも容易に推察されよう。然るに天保十五年になっても御拝借年賦仕様帳には本陣を始め、宿住民四五人の名がみえる。

「二十ヶ年賦（十一名）

メ金一一七兩二分一朱四九貫七八七文

十ヶ年賦(十一名)

メ金三九兩二朱八貫五一六文

五ヶ年賦(十三名)

メ金三二兩二分一朱一〇貫一九四文

その他(十一名)

メ金二八兩一分七貫四二〇文(一)

これらの中には家屋敷を借金の返済に引当てても尚多額の負債がある者七名に及んでいる。然るに文化十二年領主より金五十兩を拝借した十八軒の柴町の旅籠屋中、甚平・源左衛門・利左衛門・平七・弥平の名は依然として見えるが、他の旅籠屋の名は見えない。これは旅籠屋階層が宿内に於ては比較的経済的に余裕があったからではなからうか。

然し、天保期には宿住民が相当に困窮状態にあったことは明らかである。しかも、宿住民の負債はこれだけであったとは考えられない。例幣使街道周辺の農村地帯では文化〓天保期にかけて商品経済の浸透が著しく、町方、地方商人の活躍が目立ってくる⁽²⁾。このような商人階層からの農民の借金は急速に増大しつつあったのである⁽³⁾。柴宿の宿住民も人馬継立の負担のみを一方的に課せられていたとすれば当然、他にも相当の負債があっ

たものと考えられるのである。

然らば、例幣使街道の宿駅では商品流通の展開に伴って、宿に与えられた商人荷物輸送の特権、問屋口銭は増大したであろうか。前述の通り、八木宿に於ては天保期における宿立馬一ヶ年の入用錢五五貫九〇〇文に對し、僅か1%の五五〇文にすぎなかったのである。

従って幕末になり、公用人馬の継立が増大すれば宿が窮乏化するのは必然である。かくて、慶応元年には宿駅としての機能をも麻痺の状態に追込まれていたのである。慶応元年の日メ帳に見える問屋・年寄の輪番制は、このような事情を考慮に入れなければならない。家格・伝統を誇る本陣、名主などの旧家は宿駅制の負担過重の為に窮乏し、代って宿の財政面に大きな役割を果しつつあった旅籠屋等の商人層が登場してくるのではなからうか⁽⁴⁾。

例えば、八木宿における天保十年の宿財政の総収入に對する旅籠屋の負担の割合を見ると次の通りである。

「総収入 米貳俵

金壹兩貳分

錢貳百貳拾八貫四百拾貳文

旅籠屋負担分

錢七拾貳貫四百文

第 8 表 柴 宿 間 屋 年 寄 交 還 表 ◎間屋 ○年寄 ◎間屋年寄兼帶 △は不明確なもの

氏 名	階 層 別	文化11年	天保2	元 治 2		信 借		金		高	
				A	B	文 化	12 年	天 保	15 年	明 治	1
1 伊市衛門	旅籠入升屋 名主 旅籠か	◎	○	○	◎			12両 3 分 4 朱140文			
2 左衛門		◎	○	○	◎						
3 左衛門		◎	○	○	◎						
4 右兵衛		◎	○	○	◎						
5 右兵衛		◎	○	○	◎						
6 左衛門		◎	○	○	◎						
7 左衛門		◎	○	○	◎						
8 左衛門		◎	○	○	◎						
9 左衛門		◎	○	○	◎						
10 左衛門		◎	○	○	◎						
11 左衛門		◎	○	○	◎						
12 左衛門		◎	○	○	◎						
13 左衛門		◎	○	○	◎						
14 左衛門		◎	○	○	◎						
15 左衛門		◎	○	○	◎						
16 左衛門		◎	○	○	◎						
17 左衛門		◎	○	○	◎						
18 左衛門		◎	○	○	◎						
19 左衛門		◎	○	○	◎						
20 左衛門		◎	○	○	◎						
21 左衛門		◎	○	○	◎						
22 左衛門		◎	○	○	◎						
23 左衛門		◎	○	○	◎						
24 左衛門		◎	○	○	◎						
25 左衛門		◎	○	○	◎						
26 左衛門		◎	○	○	◎						
27 左衛門		◎	○	○	◎						
28 左衛門		◎	○	○	◎						
29 左衛門		◎	○	○	◎						
30 左衛門		◎	○	○	◎						
31 左衛門		◎	○	○	◎						
32 左衛門		◎	○	○	◎						
33 左衛門		◎	○	○	◎						
34 合 計		◎	○	○	◎						

註

◎文化11年～日光山御法会御用留による ◎天保2年差上申一札事（利根川渡船動につき嘆願）による
◎元治2年～A御法会ニ付九日往繼立日ノ帳による、古文書毀損のため合計数と一致せず B元治2年御繼立人馬日ノ帳による

江戸時代後期にわたる世帯の秋型（史料）

飯売旅籠屋貳拾八軒宿入用足錢

錢七拾九貫六百文

関東御取締出役火附盜賊御改方足錢 (5)

旅籠屋負担分錢百五十二貫文は宿入用の殆ど三分の二の割合となっている。柴宿に於ては、こうした階層が宿の運営に発言権を持つようになった結果、問屋・年寄役の輪番制が行われるようになったのではなからうか。

又、伝馬役の負担者である宿住民の困窮は、慶応元年における困人馬五人五疋すらも維持出来ない程に宿駅制を衰退させていったものと思われる。

註

- (1) 関根家文書「日光御神忌ニ付年賦拝借貸付」文化十二年
- (2) 拙稿、利根川舟運の展開(歴史地理九〇の一)参照
- (3) 群馬県佐波郡玉村町五料、旧河岸問屋高橋家文書中の借金証文は文化・天保期にかけて著しく増加を示している。
- (4) 問屋・年寄変遷表は判明したものだけ記入したので必ずしも正確とはいえないが、新旧の交代があったことが窺われる。
- (5) 中央鉄道学園「宿賄諸入用勘定帳」天保十五年

むすび

日光例幣使街道は日光廟に参向する公家衆の為に開設

されたが、その重要性に鑑み、明和元年に道中奉行の支配となった。従って、他の街道とは異り、特殊な条件下におかれていた。背後に前橋・伊勢崎などの都市が控えていたが、江戸との物資の交流には余り重要な街道とはいえなかった。従って、日光廟に参向する公家衆の通行を除けば、大名衆の通行も至って少く、商人荷物の輸送もごく限られたものであった。

幕末になり、公用人馬の継立数が増大すれば、それだけ宿の負担が重荷となってきたことは当然である。たとえ、幕府及び領主の助成があったとしても、宿の窮乏化、御伝馬の減少を抑えることは出来なかった。幕末になり、朝暮関係の比重の変化は御神忌大通行にみられる通り、公家衆一行の人数の増加となり、宿住民を負担に迫込む結果となった。かくて、幕府権力によって維持され、庇護されてきた宿駅制度は江戸幕府と命運を共にし、幕末には急速に崩壊の道を辿りつつあったといえよう。

以上、甚だ粗略ではあったが、江戸時代後期における宿駅の実態を明らかにしようと努めたつもりである。研究不足の為、誤りもあるかと思われるが、御寛恕を乞う次第である。なお、史料を借覧させて頂いた関根家及び閲覧させて頂いた中央鉄道学園図書館の方々に厚く謝意を表する次第である。

(玉川学園勤務)